



胡同に残る住まい

中国各省を旅してみる

北京で10年ぶりの歴史散歩をしてみると

北京の歴史を語るものは決して、万里の長城や故宮だけではない。下町と評される胡同の中にこそ、本当に歴史が隠されているように思えてならない。悠久の木々に囲まれた、爽やかな風が吹き抜ける胡同に足を踏み入れ、この10年の北京の変化を肌で感じてみた。

文・写真 / 須賀 努



須賀 努 (すが つとむ)

1961年東京生まれ。東京外国語大学中国語学科卒。コラムニスト/アジアアンウォッチャー。金融機関で上海留学1年、台湾出向2年、香港9年、北京5年の駐在経験あり。現在はアジア各地をほつつき歩き、コラム執筆。お茶をキーワードにした「茶旅」も敢行。

筆者は過去2回、北京に住んだことがある。1回目は2000年前後、そして2回目は2007年から10年まで。このわずか数年の間でも中国の変化、北京の変化は激しかった。特に2回目は北京オリンピックや建国60周年の記念行事があり、街並がどんどん変わり、そして人々の行動や考え方も大きく変わっていった時期であった。

そんな時、北京歴史散歩という企画を一人で行っていた。実はその前の香港駐在の時に、『香港歴史散歩の会』を立ち上げ、『香港に歴史はあるのか』というテーマで、各地を歩き、その歴史的な場所を確認したことがあった。勿論北京の方が遥かに歴史的な遺産はある。今回はその北京を訪ね、ほんの一部、思い出の地を巡りながら、最新の状況をアップデートしてみたところ、意外な変化に出会い、驚いた。皆さんも是非一度北京の巷を歩いて見て欲しい。

尚古き良き北京を語る上で外せないのが胡同と呼ばれる狭い路地である。これを日本的に『こどう』と読むと、どうしても古道を思い浮かべてしまうが、それでは全く違ったものになってしまう。胡同は元朝時代に新しい都大都が建設される過程で出現したとされ、語源はモンゴル語だとの説がある。やはり『フートン』と呼ぶのが相応しい。

科挙の地、貢院

午前7時台の北京は夏が近いとはいえ、かなり爽やかな風が吹き、絶好の散歩日和だった。昔住んでいた建国門駅に差し掛かると、今中国で流行のモトバイクなど、レンタル自

転車がところ狭しと並んでおり、朝からスマホでスキャンして自転車に乗る若者を多く見た。乗車も乗り捨ても自由のこの便利さ、日本では認められまいが、何とも気軽だ。

建国門から長安街を二環路内へ進むとすぐに聳え立つビルがある。中国社会科学院、中国における社会科学分野、経済は勿論哲学や文学を含む最高のシンクタンクであり、3000人以上の人材を抱える中国の頭脳と言える。10階を超える立派な建物が広がる。社会科学院に所属する研究者に何人か知人がいるが、その全てが明らかに優秀、日本語の出来る人材も豊富で、多才である。

その建物の両側の道が貢院東街と西街と書かれている。貢院、それは隋の時代から1905年まで続いた中国の公務員登用制度である科挙の都での試験場であり、社会科学院はその歴史を受け継ぐべく跡地に建てられたと言われている。何とも意義の深い場所ではないか。

科挙は先ず地方で『県試』『府試』『院試』の3段階の試験を潜り抜け、そして役人の末席である生員となる。その後3年に一度各省の省府で行われる『郷試』に合格して初めて首都北京に上り、『順天会試』をここ貢院で受験する。最後に皇帝自らが行う『殿試』は形式的なものであったらしいが、気の遠くなる道のりであり、またここに来てきた人々が如何に秀才であったかは今や想像すらできない。

科挙は王朝が変わっても継続された独特の制度である。どうしても王朝、支配者一族の専横が起りがちな中国で、閹閹に縛られず

優秀な人材を登用し、国を治めていくという実務的な、そして合理的な制度と言える。現在この貢院の通りにその名残は見つかからない。僅かに胡同が点在する。10年前は老人たちが中国将棋に興じている姿が見られたが、更なる開発の波がこのあたりを襲っている。

貢院の北を少し歩くと貢院頭条という道がある。その真ん中に『四川省人民政府駐北京弁事処』と書かれた立派な建物が見える。北京には地方政府の北京事務所が大体ある。やはり北京が国の首都だと感じるのはいくつか場所を見た時である。上海は経済の中心であるが、政治の中心は北京。各省は何かあると中央と連絡を取り合う必要がある、また全国人民代表大会の代表をはじめ地元要人の北京訪問も多く、事務所が必要なのである。因みにこの四川料理は誠に本場の味で絶品だったが、今はどうだろうか。

五四運動と趙家楼

北総布胡同に入る。狭い胡同では、朝からおばさんが隣の若者を怒鳴りつけている。「そんなところに自転車停めたら迷惑だろう。さっさとどけて」と厳しい。狭い場所を皆で共有して生きていくのだから、当然小さな諍いは常に起こる。そして胡同では隣の事情は全て筒抜けだから、隠しようもない。トイレも公廁を使い、昔は『二ハオトイレ』と言われた、扉はおろか仕切りもないところで用を足していた。思い起こせば北京オリンピックを契機に、胡同も見直され、再開発の中止、保護の動きも見られ、合わせて公廁の現代化も図られた。

更に歩いていくと、直ぐに趙家楼飯店に行

き着く。ここが五四運動の時、親日政治家として売国奴と呼ばれた曹汝霖の屋敷があった場所だ。門の所にプレートが嵌っており、その説明がなされていた。ホテルは決して高級とは思われないが、窓に特徴があり、やや硬い印象を持つ。東楼と西楼の2つに別れている。今日この場所に立つても、五四運動に関連したものを発見することは出来ないし、思いに耽るすべはない。

そもそも五四運動とは何だったのか？ 第一次大戦後のパリ講和会議でドイツが有していた山東の権益を日本に譲渡したことに抗議した学生3000人は天安門広場に集まり、日本大使館（現在の市人民政府）に向けてデモ

行進したが、行く手を阻まれたため、進路を変更して当時売国奴と言われた親日政治家曹汝霖（早稲田などに留学）宅を焼き討ちした。その後焼き討ちした学生は逮捕、拘留されるが、釈放要求のデモ、集会が全国に広がり、曹汝霖、章宗祥などが罷免されて終了。2年後にはその運動に刺激されて中国共産党が設立される契機ともなったと言われている歴史的な事件である。

尚この焼き討ちの際、たまたま居合わせた駐日公使、章宗祥が学生に殴打されたが、そこに一人の日本人が駆け付け、彼を救出したと言うエピソードがある。その日本人こそ、中江兆民の息子、中江丑吉。彼は30年以上北



再開発の波が止まらない胡同

林徽因はかなりの美人だったようで、詩人徐志摩をはじめ、多くの文化人から愛され、多くのエピソードが残っている。調べれば面白い人物らしい。日本ではあまり知られていない林徽因だが、現在中国の書店に行けば、必ず彼女の詩集などが置いてある。当時の最先端女性に今でも憧れる中国女性が多いというところだろう。

梁思成は父の梁啓超が变法自強運動を行い、戊戌の政変で日本に亡命した直後に東京で生まれた。アメリカに建築の勉強に行き、新中

外交部街という珍しい胡同があった。東側側から入るとすぐに協和病院住宅群がある。先ほど出てきたロックフェラー基金が作った病院の職員住宅跡である。今は公開されてお

最後に蔡元培故居に立ち寄る。この故居は2000年に危うく取り壊される所であった。周りは全て取り壊され、この家も一部壊された所で、北京市文物局が何とかストップをかけた。

因みに趙家楼飯店の向かい側には『太太の客間』と呼ばれた家があった。30年代文化人が多く集まったその家は梁啓超の息子、梁思成とその妻であり女性建築家、著名作家で詩人でもあった林徽因の住まいであった。現在は全てが壊されてしまっており、再開発の最中である。残念ながら1930年代の余韻は全くなく、往時を偲ぶものは何も残っていない。

そういえば、北京の風物詩と言えば、冬の白菜に夏の西瓜だが、以前はトラックで大量に運ばれ、山積みされた西瓜、今回その光景に全く出会わない。理由を聞くと『これだけフルーツの種類が増えた中、子供の頃山ほど食べた西瓜など食べたくない』と言い、トラックなどが五環路内進入禁止になったためともいう。更に中国で果物店が急増しているのは、大資本がチェーン展開しているためで、大量生産大量販売、決して昔ながらの美味しい果物にはあり付けない現状がある。

先ほど貢院で触れた科挙自体は100年前に廃止されているが、まさに現代の科挙が、目の前で繰り広げられていた。この高考や中考は、古の県試や郷試に当たると思われる。大学卒業後、国家公務員試験に合格することが、今でも優秀な学生の最大の目標とも言われるが、それは会試に当たり、これからの国家を背負う立場となる。科挙は形を変えて生きていく、と感じざるを得ない。

今回は東二環路内のほんの一部を紹介したが、何しろ北京は広い。二環路内だけでも歩いて回れば、興味深い歴史的な遺産が数多くあり、またそこに今も住んでいる人々がいて、その息遣いも聞こえてくる。まさに生の中国が身近で見られる、稀有な場所なのかもしれない。万里の長城や故宮だけではなく、たまには胡同に足を踏み入れて欲しい。とにかく、開発の波が胡同が無くなることを祈っている。

ホテルから更に北に向かうと、右側に大きな屋敷があった。『旧宅院』とプレートが嵌め込まれている。一体何かと思ったが大きな門はしっかりと閉められており中を窺うことはできない。そこはアメリカの石油王ロックフェラーの基金会会長が協和病院を造った際、余った建材で父母のために建てた別宅とか。一時は日本の官僚も使用したらしい。

尚趙家楼飯店の北側にも古い建物が残っていたが、何とそこは今、運送会社の集配所として使われていた。最近の中国では、特に若者は商品をネットで購入するため、配送業者が激しく行き交っているが、配送員の多くは地方出身の若者で、このきつい仕事で数年稼ぎ、故郷に戻るのだという。

最近日本でも中国の統一大学入試である『高考』が注目を集めており、6月初めの試験後にはいくつもの報道がなされていたが、実は高校入試『中考』も熾烈を極めていたようだ。全くの偶然ながら、その当日に散歩で出くわした。実に多くの家族が自分の子供や孫の試験成功を祈り、炎天下の中じっと待っている姿には感動すら覚える。

帰りは地下鉄で建国門駅まで戻る。ところで北京の地下鉄の面白いところは2号線の方が1号線より先に出来たということ。それが証拠に建国門駅では2号線の下に1号線があり、調べてみると何と1969年10月に2号線が開通している。工事期間4年、文革中にも50年近く前に地下鉄があったことは意外である。防空壕だったのだろうか。

京に住み、中国古代思想史の研究に没頭。事件当日は旧知の曹汝霖宅の危機を聞き、助けに来たという昔気質、律儀な男であつたらしい。今より民間での日中の交流は活発であり、垣根が低かったともいえる。

国後は北京の都市計画に関わるなど、建築家として知られる人物である。彼は北京の街並みに民族的様式を入れるべき、城壁を守るべきと主張したが、社会主義中国ではこれらが否定され、失意のうちに世を去った。もし今彼の主張を取り入れていれば、北京の街、そして胡同もかなり違っていたとも言われている。

その先には迎賓館と書かれた立派な建物がある。清末の1908年、海外の賓客を迎えるため、アメリカ人が設計した西洋式の建物であり、1966年までは現政府の外交部がこの建物を使っていたとある。更に歩くと、『中考』のため、クラクションを鳴らすな』という表示が見えた。見るとそこには1923年設立の北京二十四中学があった。

蔡は1917年に北京大学学長に就任する。李大釗、陳独秀、魯迅等先進的な知識人を積極的に招聘した結果、北大は中国に於ける学術の、そして新文化運動の中心となった。自身は『美術』の授業を担当、学生が詰め掛けて常に教室は満員だったと言う。しかし五四運動が発生すると各方面からの批判が強まり、1923年には辞職を迫られる。中国の近代化は五四運動から始まった。そしてその中心は北京大学、それを支えたのは文化・思想の開放であった。



辛うじて再開発を免れた蔡元培故居



趙家楼飯店脇の配送会社



中考の子供を胡同で待つ家族



建国門に並ぶレンタル自転車